

沖つ島 行き渡りて 潜くちふ
鮫珠もが 包みて遣らむ

大伴家持(巻十八・四一〇三)

ンパしようとする歌などもあります。

このように、「万葉集」にはたぐさんの旅の歌が残されています。

それは、旅のおみやげ話として、故郷の家族や仲間たちに、その時々を披露していたからかもしれません。

日本人のおみやげ好きのルーツは、実は「万葉集」にある……

のかもしれない。

(県立万葉文化館主任 研究員・大谷坂)

|| 原則、隔週掲載

という鮫玉がほしい。包んで都に贈ろう。

やまと 万葉がたり

だ、長歌と短歌四首のうち一首です。題詞には、奈良の都の家に贈るために真珠を願う歌、とあります。長歌では、家で自分のことを待ち続けている妻・坂上大嬢を慰めようと、「鮫玉」(真珠)を贈るのだと詠まれています。家持はいわば単身赴任中ですので旅行中ではありません

が、愛妻家の一面が垣間見える一首です。当時、真珠は旅のおみやげとしては最高級の品であったよう、旅に出た万葉ひとたちは、海に行っては浜におみやげを探す一方、打ちあがった真珠を拾おとします。「万葉集」の旅の歌に海の風

景を詠んだ歌が多いのも、海に馴染みのない大和国の人々にとって、海はとも興味をひかれる景物だっためでしよう。奥さんのおみやげを探す一方、男たちは海で働く海女たちに興味津々だったよう、海女さんをナ

夏になると、大学のゼミや研究会の合宿などで、毎年のように奈良を訪れていたことを思い出します。炎天下の中、自転車で明日香村をめぐるたり、山辺の道を歩いたり。奈良は空が澄んでいるせいか、太陽がとても近く感じたことを覚えてい

ます。 今回の歌は、749 (天平感宝元)年5月14日に、越中国守であった大伴家持が詠ん

旅の楽しみ方は十人十色ですが、私としてはやはりおみやげを



今年の夏は記録的な
猛暑が続ぎ、記憶に残
る過酷な夏であったよ
うに思います。9月も
中旬となり、明日香村
の風景もだんだん秋め
いてきました。
今回の歌に詠まれて
いる「尾花」は、ススキ
のことです。そのス
スキの下には、「思ひ
草」が生えているのだ

道の辺の

尾花をばなが下したの

思ひ草

今さらさらに 何をか思はむ

作者未詳(巻十・二二七〇)

やまと 万葉がたり

といいます。この「思
ひ草」は、ハマウツボ
科のナンバンギセルハナ||
写真||という植物だと
考えられています。ス
スキなどの根に寄生し
て生育する植物で、秋
になるとキセルのよう
な筒型の薄紫色の花を
咲かせます。その花は
うつむいているような
形をしているため、万
葉びとたちは物思ひの

象徴として歌に写し取
ったのでしよう。

しょう。つまり、この
作者は「今さら」あと
には引けない、危険な
恋に身を投じたのだと
推測できます。うつむ
いて咲く「思ひ草」の
様子から一転して、恋
に生きる決意を表明し
た、作者の強い意志を
感じさせる一首です。

この歌では、その「思
ひ草」にかけて、今さら
物思ひをする必要など
ないことを宣言してい
ます。この歌は「秋相
聞」に分類されていま
すので、作者の物思ひ
は恋にまつわるもので

は、今ナンバンギセル
が花を咲かせていま
す。ナンバンギセルの
前で、皆さんも万葉び
とたちの物思ひに触れ
てみてはいかがでしょ
うか。
(県立万葉文化館主任
研究員・大谷歩)

【訳】道のほとりの尾花の下の思ひ草のように、
今さら改めて何を思ひましようか。

原則、隔週掲載

作者の性別は不明です
が、万葉びとたちの恋
愛模様を自由に想像し
てみるのも、「万葉集」
の楽しみ方の一つでは
ないかと思えます。
万葉文化館の庭園で